





又ハ不詳

道人ニナリト云  
語ノシバ仰也則  
道ノ印ニ枝ヲ  
折コトセ書ノ  
シヨリト云モ  
印折ト云コト  
テ紙ヲ折キ以  
ナス  
持ノ莫キ

水終し

# 文屋唐本乃

ゆうじに紙のよ木のよをも  
あぐらをりくらす  
古今日本秋 是貞観の家のうきの紙  
とくとフカカラニとくとく  
しち昇水ヲとくとくて昇る水の絆をシヨルとく  
とくはまよわらるて昇る水の絆をシヨルとく  
あすムベとくとくホウドモウヒテ  
アツカタモトモトモトモトモトモトモトモ  
アツカタモトモトモトモトモトモトモトモトモ  
アツカタモトモトモトモトモトモトモトモトモ  
アツカタモトモトモトモトモトモトモトモトモ  
アツカタモトモトモトモトモトモトモトモトモ

參議從三位是  
善卿ノ三男也  
宇多天皇ノ侍  
壇也

# 吉家

不得

ふるひのむすびの秋はよし  
古今は秋。是負程の家のあ念のあく  
そ千千子トキの反手千子の時刻とよすもあく  
アラモドとあらちもくじて下の筋兩よトの  
辯もげ上の間を反持く一首の歌は秋より  
急いでかきこめるもあらう我得とよす付う  
あらぬよと内をどくぞとせめ割くとよす付う  
やまくとよす付う

參議音人卿ノ  
男也

# 大江千里

内つるもうがだよみのくわ、さきりの  
二ノ

すれすれとまくらの初めうへてはるち自れにす  
すまくらの風あるを利みおたるかとてぐべとす  
是と毎利議とお則りウのリウと多々ぐべと  
なう一のやうけぬう烈吹うててはる本のまよ  
のまよのまよとあらゆをほらう風をあらうとふらう  
玉あらむとよしを行はるまよとよしを行はる  
りあらむとよしを行はるまよとよしを行はる

スサ 漢字云本語ハ

又トハ暗コト

くサトハ割

心ノ穢テ暗ナ  
割拂ト云借テ書

幣字ヲ借テ書

ト云訳ハヘハ  
太陽ノ天地ノ  
暗中ヨリ出ノ  
伯シ故ニヘ音  
在文字ヲ以テ音  
又サヨム水穂處  
傳ニ有天地處  
ト伯ノ起ヲ云  
合テ可知

とてとてとてとて  
古今集羣流 朱若院もふ良みれや  
上

とてとてとてとて  
とてとてとてとて  
和巾をとてとてとて  
とてとてとてとて

ビヒヒヒヒヒヒヒヒ  
ヒヒヒヒヒヒヒヒ  
ヒヒヒヒヒヒヒヒ  
ヒヒヒヒヒヒヒヒ

昔ハ五色ノ紙  
ナトヲ切也  
トセシ也  
散幣ト云此度  
ハ此山ノ紅葉  
ノ錦ニハ紅葉  
ルシケレバ得  
奉ストテ山ノ  
紅葉ヲ庭美シ  
タル可也

とてとてとてとて  
トリアヘズトアヘヌ工手で取得ヒ  
とてとてとてとて  
ミキマニマニモキヒヒヒヒヒヒ  
とてとてとてとて  
品ニナクヒヒヒヒヒヒ  
とてとてとてとて  
をハ散幣モ多賜セテ既に一目ノ御見  
とてとてとてとて  
元ナクモラクモラクモラクモラク  
とてとてとてとて  
ミキナクヒヒヒヒヒヒ  
とてとてとてとて  
散幣モ多賜セテ既に一目ノ御見  
とてとてとてとて  
ナクモラクモラクモラクモラク  
とてとてとてとて

父八內大臣高  
藤公也

三條右大臣

細根

三條右大臣  
さとじょううどん  
細根  
さといね  
後撰集本  
ナニシオハバ相坂山よりはりよ高と貢てそひの  
とみうをとみゆしサヰカヅラとサ子ミ細根あり  
サヰ持子ナカヅラと葛ヌ草のとも人ニ知ラ  
サヰ  
ワル  
サヰ  
サヰ

ノ	子	細	根
ノ	総	根	根
ノ	葛	葛	葛
ノ	ト	ト	ト
ノ	云	云	名
ノ	名	名	名
ノ	五味	五味	五味
ノ	タ	タ	タ
ノ	ル	ル	ル
ノ	名	名	名
ノ	葛	葛	葛
ノ	草	草	草
ノ	ト	ト	ト
ノ	云	云	云
ノ	語	語	語
ノ	ノ	ノ	ノ
ノ	ラ	ラ	ラ
ノ	ト	ト	ト
ノ	在	在	在
ノ	サ	サ	サ
ノ	キ	キ	キ
ノ	モ	モ	モ
ノ	ナ	ナ	ナ
ノ	レ	レ	レ
ノ	シ	シ	シ
ノ	ツ	ツ	ツ
ノ	カ	カ	カ
ノ	後	後	後
ノ	櫻	櫻	櫻

レテお親玉知りてよりておもて御も得へと  
りておもてテ清音もアハ得也此ノヨシモガ  
トスカルモ東洋の豪車も此車もアヨシ  
ヨシモガラモのトモガボのトモリムモ待テ  
カナモ駆ヒニ自リウニ達ヒリ名も直アテ  
モ相坂山でもモアラヒシの細柏葛のやうに  
サニカツラ  
サニカツラトモガラモ得也得ノアハ豪車もアハ  
車モアハモアモ媒モ得ノアハ豪車もアハ  
ハトモアハモ人モアハモアハモアハ豪車もアハ  
モアハモアハモアハモアハモアハモアハモアハ

負信公

忠平公

拾遺集

かねりてせみよとのへ奏せんやてとけ

臨幸のとく日本紀畧より延長四年十月十日法皇幸

大井川同月十九日天皇幸大井川法白王同幸之老

十月十日法皇大井川行幸のば小倉山をさんむあり

وَمِنْ أَنْتَ مُصَدِّقٌ لِّكُلِّ شَيْءٍ وَلَا يُكَلِّفُكَ أَنْ تُحْكِمَ كُلَّ شَيْءٍ

太政大臣昭宣  
公男之  
景平六年任大  
政大臣

負信公

忠平公

貞信公より御書を承り候る事無く御存外

御存外御書を承り候る事無く御存外

## 中納言つ事輔

こののちにかくはいふてゆきの泉川  
何うつとくいふてゆきの泉川  
不審

右中將利基ノ  
男ノ  
延喜八年兼右  
卫門督

新古今集惠

歌をひども

如丈頭  
嘉平六年卦大  
み開ノ  
大藏大藏記

立門等  
長壽の事  
留メ  
本中野は基

ミカ  
豈かのあゝ山勢國相樂樂歌聖武天皇智  
恵も御子御孫ア所あら久の水津川の傍で泉  
川をうき流す泉川をもて流金の水御す  
君が乃原とて流す水御キテとて涌を  
御の涌くまくたるかくいつこの川の  
泉の名のゆうと出水御を何日とて御す  
モモイロキのキテナリの反そく何りうんケリとよ  
モモトテモトテくカハ如是と何日えりとよ  
草木の名とて御すと御かしらてお少し  
云の名とて御すと御かしらてお少しとて御て

ちうくみぬ水御のやうにうるなんとてめ是  
川音うすくとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
いととととととととととととととととととととと  
とととととととととととととととととととととと

## 源宗千朝臣

山里のあらじめのやうにうるなんとてめ是  
いととととととととととととととととととととと  
とととととととととととととととととととととと

一品式部卿是忠親王(男)右京大支一位下  
式部卿本康親(男)正四品

本ノ知テ此哥  
ノ意ヲ知ニ

·凡河內躬恒

性氏不詳  
古今集撰者  
甲斐少目御厨  
子所頌

心ありよとぞやとすもゆゑの  
わくよどハセムをりゆくに  
在る集秋 白菊の花はうらら  
心アテと我極むる南キノモニヲバヤヲムト  
リヤシ合とらずしておもつてかくらぬとの兩<sup>スラ</sup>  
から辞みてテムと歌ひとマドハセルと白菊の白づ

古今傳本忠  
アリヤケミ前より照て写りて  
ツナクミ連れて我タシヒムスルトモ  
アカリ本語アカリギバカリミ前より虚実を  
察しけずかくもて達してうつて叶ひあら  
うつてあるうなむとて解して四つをもくす  
うつてあるうなむとて解して四つをもくす  
うつてあるうなむとて解して四つをもくす  
うつてあるうなむとて解して四つをもくす

士生忠少子  
そひめつひアキミ  
せんじやくとくのゆゑ

父ハ齊生木ユ  
兄忠衛ニ

うお本語のゆゑもゆてもう文圖の分る  
きよひつるのゆゑもゆてもう文圖の分る  
あらわしゆゑ自らもゆゑもゆてもう  
余柄もゆゑもゆゑもゆゑもゆゑもゆゑも  
ちももゆゑもゆゑもゆゑもゆゑもゆゑも  
ももももももももももももももももも  
ももももももももももももももももも  
ももももももももももももももももも  
ももももももももももももももももも

姓氏不詳  
大內記徒五位  
下加賀少

坂上是則

左右見

坂上是則ウキ  
左右ウスラ見ミテ

新名宿 称男

延喜二十年住

壹岐守文章傳

士正六位上

博

## 春日道列樹

柵ト云語ノ李  
水柵ニテ水物  
カラムト云コト

けら跡ハラの村白川トモ登る山のあかるき  
近キテ木立たるす木を皆刈リモ所をカセ  
カラ風ウ吹ケタリそ風の頻シ以テ木々  
シカラミ柵シアヌトアヘの反工アリて流得シ

とこ一首の白山ノあぢみ細シ山ノよ流て  
流すみじみ匂ひ匂ひ山ノよ流すみじみ水柵ト  
山ノよ流すみじみ匂ひ匂ひ山ノよ流すみじみ  
山ノよ流すみじみ匂ひ匂ひ山ノよ流すみじみ

## 紀友則

寛

父ハ宮内少輔  
在友也  
古今集ノ撰者

久堅ノ枕詞シドキシムノトシモ有る事  
古今集春 桜の花のちくわんでよけすを  
久堅ノ枕詞シドキシムノトシモ有る事

久堅ハ甄形ト  
キコトナレシ天  
ノ甄ノ形ト云  
ユト曾テナシ  
文字ニヨルノ

説

二

三

ヒサカタト云  
本語ヒハ日ナリ

サカタ太進昇

トニテ日進昇

テ傳ト云伯二

テ日月昇テ回

傳フチ久堅

空中ヲサシ

傳フチ久堅

テ云故ニ光ト

ツツケタル也

後世此枕詞ヲ

甚シキヘ委ノ

水穂傳ニ在

歌詞ト云傳ノ

傳ノ

# 藤原無風

歌詞ト云傳ノ

シカモミム力モ歌シモアリテ誰モ歌モ

カマク

ト云傳ノ

シカモミム力モ歌シモアリテ誰モ歌モ

カマク

ト云傳ノ

カマク

シカモミム力モ歌シモアリテ誰モ歌モ

カマク

ト云傳ノ

カマク

シカモミム力モ歌シモアリテ誰モ歌モ

カマク

ト云傳ノ

カマク

シカモミム力モ歌シモアリテ誰モ歌モ

カマク

ト云傳ノ

カマク

シカモミム力モ歌シモアリテ誰モ歌モ

カマク

ト云傳ノ

孝光天皇ノ末  
武内宿禰十七代  
苗裔父紀望  
木工權頭從五  
行上御書所  
古今集撰者

古事記傳  
歴代記傳  
五六五  
古今集撰者

わざわざとてはなむかうむのなまぢうむ  
往々あら蔭せりあらけあらまくは  
たのをゆきる相手をかたをすねをも  
くまうまうま

## 紀貫之

くふくしをこころむあらひのこ  
くふくぞやしのゆふ匂いのむ  
古今集本音  
和歌をやまとよしをやまとよしをは  
人のよきよきをやまとよしをは  
家のよきよきをやまとよしをは

くふをそよたてうるすあのよたおでよがれ  
くふを初御ハシタケ大和國体と那初御ハシタケ寺ちうイサギ  
かくふをそよてからひりの枕より酒カクて醉ソウと  
あくアカとアカコロモコロモとアカモモ船ボウじうて自便シラフ  
くふを解ハシタケしフル里ハシタケとハシタケとハシタケ赤アカ乘スル駒ウマ  
あくアカとアカ一ハシタケのハシタケ赤アカとアカ互ハシタケ  
人のよきよきをやまとよしをはてんのをけや  
能ハシタケてもハシタケあらぬ匂ハシタケを自ハシタケてやまと  
くふをそよたけまう人ハイサハシタケモ知ハシタケだまよ津ハシタケ  
くふをそよたけまう人ハイサハシタケモ知ハシタケだまよ津ハシタケ

知らぬよかへばよかへば

をひくかすまきり

うひきよかへばそんたんがほくあくむじの

くの石ゆきとけの香のやくにほくよ

もくふうりよこくよおの匂ひに

もくあくはもくとくわくはくはくはく

ゑやくさくさくあくはく人ひせひモの辯

とのモ我心不矢自化<sup>キハ</sup>のモの辯

食てとまつまつまつりわくちくねく

の辯

主ノ反奇  
花タニモ同ニ心ニ咲  
モノヲ植テム入ノ心  
知ラム

舍人親王五代  
孫房則ノ男ノ

### 清原深美食父

くるのあくはくはくはくのねうと  
やうとほくはくよたりやくはくよ  
古今集文 力のねすちがうる波波々とまえ  
ヨヒヨヒ本語夜初のウと省てちく明ヌルヨヒヨ

チの辞り言ひく一首のひら夏のやまと宵の

アヒグ  
アヒグ  
おもかげよゆきやまくと月をくと

夜も早さうすむかとてくらへ行ふるこちの

うちよやぐりあらもとゆもむをくと

文屋康秀ハシタケルヒサキ 男  
延喜二年住大  
舍人カモニ

# 文屋朝康

ああああすゑのうかくせのゆを  
つゝみそくわんぬむごとくげを  
後撰集秋 延喜の法時 あくわくを  
フキシツキ吹頻ヒキシ 一首のひら秋のゆのあまを  
もくるむえをとおの吹て音ソラエキ もやうみの

ちよやくよやほのふとく抑かくとくせをとく  
りよもよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ  
よよよの音ソラエキ とくよばせ。スルの兩ツカニ とくよ  
とくよの音ソラエキ とくよばせ。スルの兩ツカニ とくよ  
よもよよスルのよよよよよよよよよよよよよよよよ  
よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

嘉とく水移はせよよよよ

右近衛少将藤  
原季繩ハセヨウ

# 右 近

まよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ  
よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

拾遺集卷

経文

ひあらす互み士もと人争はうて盟をたてるも男

のまことひを知りておもひたるあらす

ナカヒトモ語り本ハナミツのまことカヒの反キテ

ナミツのヨモシ田カハソトモテ女ハ経だよどする

トモテモカナタモ感モトモ一のノハナミツ

合合をもとめ立すをやどさばく盟をもとめ立す

立すをもとめ立すをやどさばく合合をもとめ立す

やどさばく合合をもとめ立すをやどさばく合合をもとめ立す

やどさばく合合をもとめ立すをやどさばく合合をもとめ立す

やどさばく合合をもとめ立すをやどさばく合合をもとめ立す

## 參議 苛

アサナムアラ省音モサモサ細くサシチモサモサ

アサナムアラ省音モサモサ細くサシチモサモサ

アサナムアラ省音モサモサ細くサシチモサモサ

アサナムアラ省音モサモサ細くサシチモサモサ

アサナムアラ省音モサモサ細くサシチモサモサ

アサナムアラ省音モサモサ細くサシチモサモサ

アサナムアラ省音モサモサ細くサシチモサモサ

アサナムアラ省音モサモサ細くサシチモサモサ

嵯峨天皇ノ末  
中納言希卿ノ  
男也  
天晉五年叙正  
四位下

## 後撰集惠

アサナムアラ省音モサモサ細くサシチモサモサ

アサナムアラ省音モサモサ細くサシチモサモサ

アサナムアラ省音モサモサ細くサシチモサモサ

アサナムアラ省音モサモサ細くサシチモサモサ

アサナムアラ省音モサモサ細くサシチモサモサ

アサナムアラ省音モサモサ細くサシチモサモサ

アサナムアラ省音モサモサ細くサシチモサモサ

アサナムアラ省音モサモサ細くサシチモサモサ

アサナムアラ省音モサモサ細くサシチモサモサ

やまもとくわらわのひのきの錦でうへて  
是は意氣のあらわさうふ葉うるあるわ筋の  
か竹ふと云ひ皆小まの斗を序ふもて胸の狭い  
ちよだすうす夜をひそむ包あおうもて腰をとど  
ももく食たす達みあらげこすをくのあらうら  
湯をのみをひな候をくもがまん人をくわせり人  
をう間くもとけうのくわゆるよのまうわせの後條  
をあやう候くわゆるよのまうわせをくわす  
くもあらうをうねきくわゆるよのまうわせをくわす  
ひあひきくわゆるよのまうわせをくわす

# 平ノ角盛

光孝天皇ノ末  
又ハ平篤行ニ  
征五位下駿河守

やまもとくわらわのひのきの錦でうへて  
是は意氣のあらわさうふ葉うるあるわ筋の  
か竹ふと云ひ皆小まの斗を序ふもて胸の狭い  
ちよだすうす夜をひそむ包あおうもて腰をとど  
四翁不 天智天皇建五  
中興言帝中  
神武天皇ノ末

忠岑卿ノ男  
天德二年任  
津大目

# 士生忠見

白のまゝのり向うより向手のまゝまゝ  
あつすてかみるやまくちみり  
人とくらばこくわまひ津  
捨毛集惠 天曆のそんとくテアモ  
トイシトイの反チムをみてテアトラムダキ  
前うち速ヤギもあらメシガのラメタ初ハツシキコリの  
絶カム是カム在カムトモ人不知コソ思ソメシ是カム  
ちとすがタケまタケあらヒ一ツのいもさくも  
きよく人ヒトのねじりゆきりゆきりゆきりゆきり  
きよく人ヒトのねじりゆきりゆきりゆきりゆきり

父ハ下野守頭  
忠ヒサシ任肥ヒサシ後守従五

# 清原元輔

さくらもつて我獨御ムニゆをかねみてたる  
黒カマツはふももや世セの人のあくべりて我名ナウ  
まく人ヒトまくよりくらまくよりくらまくよりくら  
まく人ヒトまくよりくらまくよりくらまくよりくら  
まく人ヒトまくよりくらまくよりくらまくよりくら  
まく人ヒトまくよりくらまくよりくらまくよりくら  
まく人ヒトまくよりくらまくよりくらまくよりくら  
まく人ヒトまくよりくらまくよりくらまくよりくら  
後アフタ集惠 小がくらまよふがくらどとも  
手キリアラタ前アラタ云キナアラタケリナアラタカタニアラタハ互  
まくまく末アラタ松山アラタ後アラタツツキアラタトハ

カタミトムカ  
掘シタ列シ身  
身ヲ掘列ト云  
コトニ  
タカヒト云ノタ  
列シカヘ掘ヘアド  
ア言省テ列掘  
合トエコトナリ  
其後同十九チ  
以テカタミトハ  
互ト云コトニ

トトキナ御モ次テハモ御モバトキナシテ格  
位テ末ノ松山波ニサジトハ契クニシムアモ松モア  
トハモラヅルト云ハシリマテノタヘ  
ト云ハ神代ニモ聞ヌトモナリトモ被シ一箇のゆう事  
神モトモアムニシテ末のねらの波リトモアシモ  
互トキナシテモアシモ人モ復タモアシモサウ御  
陸奥ニシテはシテはシテはシテはシテはシテはシテ  
シテアシテはシテはシテはシテはシテはシテはシテ  
はシテはシテはシテはシテはシテはシテはシテはシテ

# 中納言敦忠

又ハ本院左大臣時平公也  
天慶五年從三位權中納言

拾遺仕あ志

題

一自のんへかくもくわざくもまくも前まくもて  
ほくまくねりかくひがくまくかくかくかくかく  
そちのとあるみじくじやうて寄りてかくの  
くよくうてうきをもむかくのとくとくとくとく  
あくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

三條

右大臣實

方公男也

天曆六年參議

徒四位上

# 中納言朝忠

正之

あつともひきとせだむしと  
助可

拾遺集惠

天曆四年

タエテシの二月より御と更たる御と助言と金毛  
身ヲモトモモトマニ可く直前の御と御てせり  
中は男女の御と御と御と御と御と御と御と御と  
人を本多を小笠を伊賀をせまらの御と御と御と  
高野の御と御と御と御と御と御と御と御と御と  
御と御と御と御と御と御と御と御と御と御と御と  
御と御と御と御と御と御と御と御と御と御と御と

# 謙德公

不貞之

あつともひきとせだむしと  
不貞之

拾遺集惠

天曆四年

才モホエヒテモシテモシテモシテモシテモシテモ  
仇モシテモシテモシテモシテモシテモシテモシテモ  
モシテモシテモシテモシテモシテモシテモシテモシテモ  
モシテモシテモシテモシテモシテモシテモシテモシテモ  
モシテモシテモシテモシテモシテモシテモシテモシテモ  
モシテモシテモシテモシテモシテモシテモシテモシテモ

九條右大臣師  
輔ムノ男ノ  
天祿ニ年十一  
月大政大臣  
二位

姓氏不詳  
寃和年中一人  
任丹波掾

曾獨好忠

新古今集志

沿路迫門セトドア  
サツマセトセト  
虫明迫トハロ  
明石迫トハロ  
十郎トハナリト  
如是波ノ裏处アシタバノウチ  
門ト云入アキラム  
ナニハヅハハヅハ  
ニキタヅキタヅ  
タカツハタカツハ  
シキツハシキツハ

如是波ノ靜丸  
心津ト云波  
ノ東津門ト

先祖不詳  
寬和年中人也

惠慶法師

たるやう思ひ乍ら思ひてゐてそれが獨り切れて流  
れ去る流すもつゝをもぢてひよかぬゑの  
えども歌ひゆづらふ  
**惠慶法師**  
ハモモヒラモモガシモモの樹  
人ニシテアラモモナシモモナシケレ  
捨遺集秋　　所居の院を舍ねたるやうに  
行基の歌をもじてアラモモナシケレ  
ハ所居の院をもじて阿奈たたは歎きの別荘をも  
東山傳と名む也の竈の景をも持てせん

かくまゆる所をバ童ムラフと草群と

ちくめいあし一の山の木々は早あたる山を  
すそをもぎりてつるをすくひよるがむぎをめぐ  
らすやうにひもて御城のまほせは湖を  
りんとうけの陰おんから高たかく波波ははは流ながる  
昇のぼ御の行跡ゆきある安政あんせいの御城ごじやうへ行こう後  
おとこはあはれ原はら院いんにてとどけるとてすなまむ  
もとの木きもあらわづに只ただ見みる物ものを有あふ。  
家のはあらわきをかひぬあらわしの集しゆで  
あらわして見るやうな名なのを付つけぬが

くふるもあらわすとてけ河かわをほんのとく源氏げんじをくふ  
くふるもあらわすとてけ河かわをほんのとく源氏げんじをくふ

## 源 壇 之

父ハ 徒五位  
上三河守兼信  
也從五位下相摸

コロトト云語ご)  
本ハハ只さ火ひノ處處  
ニテ日ひ只さ火ひノ處處  
ノ處處ニテ月つき  
則そ月つき日ひヲ指さテ  
頃ときトトえ轉かわレレテ  
益ます夜よトトモ  
頃ときトトえ

風かぜイタニに風かぜの水みずあらわすとて岩いわウ  
波なみ乃のかの風かぜアリタケタケアリ胸むねを岸しママ行ゆ  
え

天兒屋根ノ末  
也父ハ神裕大副  
祭主賴基朝臣  
也三國書寫  
也此本ハ只文  
也本ハ只文  
也本ハ只文  
也本ハ只文  
也本ハ只文

三首のくらみあひどくねりかへるのくらみ  
がきてゆるつはのかよつてくさるふくわをと  
ちゆくくらむかくよのねくのくらみ  
もくし

# 大中臣能宣朝臣

うやめんとくべくめくらむのくらみ  
くらみとくべくめくらむのくらみ  
くらみとくべくめくらむのくらみ

匂花白子恵

頭あらほと

エジミ宮中の強姦をまみりおこなはれ  
ノのよみをあきらめしキエツツとみり

音ト云本語ハ  
十八水火ノコトニ  
カテ掘ムコトニ  
テ水ハ降ヨナシ  
火ハヨトナリテ  
十文字ニ掘ムコト  
ヲ云シ故ニ茲ハ  
ヨルヒルト心ノ掘  
コトニナル

古ノ間うて掘もとあそびにタク少乃とらひ  
如くらみとくべくめくらみとくべくめくらみ  
我立スおまづくちの如くおもえくわすが  
くもくもや書く地よきくらみとくべくめくら  
みとくべくめくらみとくべくめくらみとくべく  
の辯し掘もとあそびにとくべくめくらみとくべく  
もくべくめくらみとくべくめくらみとくべく  
の辯し掘もとあそびにとくべくめくらみとくべく  
もくべくめくらみとくべくめくらみとくべく  
おもえくわすが

謙徳公ノ男  
右少將徒五位

蘿原義孝

侍從五位下實  
時男く寛和二年右中  
將正四位下陸

アラガトニシテカモリカモリカモリカモリカモリカモリ  
トモサヘミ副くがナミタカキモシケノ旨のヤハヌ  
ヒツガタヨウヘルモトムヒトモトモトモトモトモトモト  
アマタラヘルモトムヒトモトモトモトモトモトモトモト  
ヘミホトロモトシムヒトモトモトモトモトモトモトモト  
カモリルモトモトモトモトモトモトモトモトモトモト

名勝原 實方朝臣

サラン

反舞

サラン

奥守

大八郎中

近頃ノ説ニ艾  
内ヲ破テ内ニ  
サレモノニテ  
針サシト同故  
サレシハ詞ニ  
ウトシ艾ノ内  
中ニ入非火氣  
ノ入シ火ヲ以  
テセザレバ  
トナシ  
モ

アラガトニシテカモリカモリカモリカモリカモリカモリ  
ヒツガタヨウヘルモトムヒトモトモトモトモトモトモト  
アマタラヘルモトムヒトモトモトモトモトモトモトモト  
ヘミホトロモトシムヒトモトモトモトモトモトモトモト  
カモリルモトモトモトモトモトモトモトモトモトモト  
モエル思トリシラジナのナシ歎ナシトの内の箇モ

その辯をも上の詞より極めてモユル思チ  
ナミはラジナキヤシニテアマツツツツ

心と墨をどもあらう國のやうなものぢ  
うて能やうもみをほくの晒艾サシのやう猶の  
ものねねらんをひそかにさうざらしと能  
ちむかたま伊吹イブの節のあやう能國流の  
うるあらわすやほゆのよせきとくさわにわのが  
ねくよろこびとづつ枝葉あつるねのだよる  
らのまくらの枝葉伊吹の四つ手シツヂとくら

父八法性寺恒  
德公也

上左中將從四位

前よりよび出でてあるとこウラノキシテ良シ氣

ウラノキシテ良シ氣

三百のくわくをかたがたのびくわくを本  
達のくわくのうへりてよし人を立てる  
のくわくのうへりてよし人を立てる  
のくわくのうへりてよし人を立てる

東三條入道園  
白兼宗室  
人朝古今三美  
内し

土ハ法華寺  
大中院  
御殿四合

## 右大將道絹母

歌つてゐるぬれ衣のゆきら  
いふまほまほかわすらも  
捨てゆき  
人を揚めやうむぢ

中國白道達公

## 儀同三司母

儀同三司伊周  
公ノ母也

モハリのりあやどらか  
モハリセムの令わとル  
新古今集大志 中國白道筆もかくもめ  
修うるひとトモトシ前メリトのちよまの  
シテアラ接きのをけトモラトエモトツ  
後世モガナ。シガナミシムヘ辟とモミシの望  
キモガナミジムモアヒト直ウルヒセキリ  
里のさうひまつまくまくまくまくまくまく  
シテカタハシマスモアヒトモアヒトモアヒ  
シテカタハシマスモアヒトモアヒトモアヒ  
シテカタハシマスモアヒトモアヒトモアヒ  
シテカタハシマスモアヒトモアヒトモアヒ

閑白大政大臣  
賴忠公ノ男也  
權大納言正二位  
也

## 大納言公任

海りわふふくくぬゆく  
名くもよめくにむくにむく  
拾遺食本聲 大嘗寺よりもよもなづま  
ふもよもよもよもよもよもよもよも

タキト云本語

ハシギル也水語

ノ派落く伝テ

低ヨリ落ナ得

言ニ云高ヨリ

落ナ清音ニ云

大越太主

嵯峨の大嘗天ハ嵯峨のと白雲の後を跡みて  
はなづくもうせては後せまやかとく水の音も  
絶てもちりく此の音をもんてはなづくもくこの  
いふくらひを傳ひのまちをは景て年々とくみゆき  
といふへはは天白雲の後を跡みてはなづくも  
いふすあらすとくはなづくもくつるはなづくも  
はなづくもくつるはなづくもくつるはなづくも  
嵯峨院為大嘗天三代寔縁るよわ  

## 和泉式部

あくまむじゆのかのねもひゆに

和泉守 揖道真  
妻ノ後ニ丹  
後宇保昌ノ妻  
ナル保昌ト

共ニ安房国平  
群郡米沢ニ僕  
田跡在今ニ  
式部ノ鏡石在  
亦同郡那古寺  
ニ式部ノ墓碍  
在上東内院ノ女  
房也

あくまむじゆのかのねもひゆに  
後拾遺仕あ志  
うちくもくはなづくも  
人かくはなづくも  
人かくはなづくも  
人かくはなづくも  
人かくはなづくも  
人かくはなづくも  
人かくはなづくも  
アラザラムアラズアラムうちく  
のゆくもくはなづくも  
アカムチヌ泉のとく思ヒテとくは世の思ヒテ  
アコトモく達ムムルカガナムルヒテ首のゆり病  
あくまむじゆをゆてはサムアムヒアムモハナム  
をせなでぐとくびすく泉の思ヒテとくは

左衛門仇藤原

宣孝ノ妻ニ長

保三年四月

孝死ス後ニ

獨トナリテ孤

氏ヲ書寛弘二

年十二月上東

門院ニ參ル

哀文

夜半ハ晝夜ノ

分ノ時既ニ傾

思ハ哉ニ

九時ト

## 此系式部

### 大貳三位

生つるし松名碑を承りあげて

父ハ  
藤原宣孝卿  
母ハ  
紫式部  
大貳成章ノ妻

之被衣ノ作者  
一寺院御乳母  
之故ニ被叙三  
位

いとよしもんをかきやうすれ  
反辞

後拾遺集卷之二  
かくしちゆうとこのじさんせき

卷之三

在弓山アキヤマ 摂津國在弓郡之松名地人同國邊那  
シテ御弓山里アキヤマノシタモヘテアリテ行新規シンガイ御弓山アキヤマ  
カモテ雪シロクモサム物モノトシテ左シナムニセマス風フウツバトタマ  
ミシシモノモノとの事ハシナガトシテがたりてモイテソヨソヨニテイデ  
シテ御弓山アキヤマ美アシカニシテ御弓山アキヤマ風フウツバトタマ  
カモテシヤハシヤハシ友チカラ絆アハラシテ自ソノ身カラモ馬ウマシテ  
カモテシヤハシヤハシ友チカラ絆アハラシテ自ソノ身カラモ馬ウマシテ

父ハ大隅守時

用ハ

上東門院女房

（物語）作

者ハ

（物語）作

# 赤塗衛門

やまともとでぬちをもととわむえ  
仙ちでせりとアヘンと  
後拾遺集あ意 中宮白井將ははりもと  
もとせあらんがくひてとくのうへりへりへりへり  
せきこどりすてかよかくうてぶくも  
けくからくもくみりづくも内侍のとくヤスラフ  
ユウヨ 獄頑トモニ子ナマシトモアルアラマシモ  
約約とゆくサヨケニ夜の九つ時とくもくつちのハ  
かやくもまざくもあらを獨頑せじて寫ま

あらやうきのとくもくもくもかの傾力とくそそ  
行ひこマテム者もくもくあおの傾力と向手の  
あらやうき

# 小式部内侍

大江じらひくもくもくのとくりふを  
ちくもくもくもくもくもくもくもくもくもく  
金葉集解 和泉守兼保昌とくじゆはる  
はるはるはるはるはるはるはるはるはるはる  
はるはるはるはるはるはるはるはるはるはる  
はるはるはるはるはるはるはるはるはるはる

和泉守道貞女  
母ハ和泉式部  
上東門院女房

天揚立ト名ノ  
本ハアマノ御士ニ  
ハシ揚シタ  
テトハ年當ニ  
シテ海士ノ舟  
漕ヨスル揚手  
當ト云コトニ  
テ舟ヲヨセル  
例ト云名ニ委  
ハ水穂傳ニ云  
姓ヘ味東左衛  
味春喜嘉良也

リモヤシラムルカムルカムルカムルカムルカムルカムル  
ミモリムルムルムルムルムルムルムルムルムルムルムルムルムル  
孟獲國王楊主を安復へ拂ひ立ムアサササササササササササ  
のスムカムカムカムカムカムカムカムカムカムカムカムカム  
孟獲のうちはいも誠て魏郎の魏郎の魏郎の魏郎の魏郎の魏  
カムカムカムカムカムカムカムカムカムカムカムカムカムカム  
カムカムカムカムカムカムカムカムカムカムカムカムカムカム  
孟獲石里者長丈崎長二千三百十九丈廣九丈三尺是  
方者速石里者長丈崎長二千三百十九丈廣九丈三尺是  
名天揚立ト名ノ舟中七卿國分寺等とて  
茲モ保昌の白海モ在揚ケキミト古エヒムヒヒ後世後  
古江山モナ所ナシムシムシムシムシムシムシムシムシ  
け新ド大江坂モナキテスジムシムシムシムシムシムシ  
天武紀八年十一月初置閏於龍田山大江山ト在  
丹波道之大江之山々眞玉葛絕年乃心裁不思  
万葉丹波道之大江之山々眞玉葛絶年乃心裁不思  
新古今大江山越テ幾野ノ末遠ニ道アル代ニモアヒニケル哉  
右八葉田郡今至大江ノ坂ノコト

丹後ノ大江山  
其國ノ人々干支  
力巖ト唱テ夫  
江山ト不言他  
国人ノ人ノ呼名  
ト云也

伊勢大輔

いふるのまゝのひのこよびくら  
うれしにゆきめれうれ

胡花集

まことに此の如きは、必ず御心に御存じなつたる事

もあまにあまのねがのくも様をうかがひのま  
あまんをうかがひのまの様もあ人のうらをゆておま

筑前守高階成  
順ノ妻之上東  
門院女房

父八清原元坤  
之生涯獨身  
枕草紙作者之一  
一条院皇后宮  
女房

清少納言

帥內大臣伊周  
公ノ男亡  
萬壽五年四月  
在京權大夫

左京丈道雅

の仕事はオモヒタエナムと思ふ  
ハカリ内裏より御入を思ふ  
いとがく人トヨシニ義ニモ  
ガナリ一昔の事あらばを今思ふ  
との難ニハシモ其のつども御先  
をかうむ言人移おんじてすまへたる  
ヒトコト  
スル

公任卿ノ男  
長元二年任權  
中納言長久三  
年正二位

# 權 中納言定頼

おほきの川を傍たまに  
あくまくおゆみの國代は  
千載自來も おもがてはるはよ  
とす山城國の國代ある後よりアサモ  
朝あつて一朝の朝あつてはよの川を  
さかのをさかの湯をよじるまへ  
おもねりていつまちよふやうの徳をひま  
うるみと國代のあらわしをひま  
とおもておもてはよけたる年のあまもアラモハ

延喜内  
宇治迎江田上  
氷奥細代各  
处始九月至  
之三十日貞

の書の絶るゝ國代のアスヤマニヒルシの  
御水の流れる御水の御水の御水の御水の  
うきこしていはよ直を許すけ國代もり  
ものアスヤマニヒルシの度トトモテ美と  
御水を度あよ守人の居す床と藤簾と竹と  
簾の上に氷奥をもと入てとくかくもとく形  
彌と似たるゝ國代の本とくとく

# 相摸

相模守大江公  
資妻入道一品宮女  
房入道一品宮女

自二十日  
午後大風  
夜雨  
十一月  
晴

後拾還集惠  
承蒙古事記  
多々うなづか  
心のへり他に  
ワビと自らもあらと恨  
ムホサヌ神とく湯ヌ神の乾るのをぞりタニ  
キニのとうづた右の牛の兩し赤あく見えだす脛  
度とくアモヨヒタマトモハシモ神  
テムシカタハナリ初ニ首のひき石を恨みあら  
モ恨て後よ傷て乾ぬ神と右たとおよもよを  
け付とくもつけてもあはるのむすもあらむ  
物をもくらでニ神の湯はすごんでものむと申す



